

令和五年度入学試験問題 国語（五十分）

二月一日（午前） 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は15ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答主紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答主紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答主紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督の先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生の羊子の祖母は、数週間前から入院していました。祖母の長女である母は、祖母の容態を知り家で泣いており、そんな母を見て以来、羊子はしばしば病院に見舞いに行きます。そんな羊子に、祖母はいつもと変わらぬそっけない様子で、時々用事を言いつけたりしました。

「ねえ、羊子、本をさがしてほしいんだけど」

あるときおばあちゃんはそう言った。

「いいよ、何。買ってくる」

「下の売店にはないよ。大きな本屋さんにはなくちゃならないと思うよ」

「わかった。明日放課後いつてみる。なんて本？」

おばあちゃんはじつと私を見ていたが、ベッドのわきに置かれた机の引き出しから紙とペンを出し、眼鏡を掛け、なにやら文字を書きつけた。渡されたメモを見ると、私の知らない名前に、私の知らないタイトルが、殴り書きされていた。

「えー、聞いたことないよ、こんな本」私は言った。

「あんななんかなんにも知らないんだから、聞いたことのある本のほうが少ないだろうよ」

おばあちゃんは言った。①「こういうもの言いをする人なのだ。」

「出版社はどこなの」

「さあ。お店の人に言えばわかるよ」

「わかった。さがしてみるけど」

メモをスカートのポケットに入れると、おばあちゃんは私を手招きした。ベッドに身を乗り出して耳を近づける。

「そのこと、だれにも言うんじゃないよ。あんなのおかあさんにも、おばさんたちにも。あんながひとりできがしておくれ」

おばあちゃんの息は不思議なおいがした。いいにおいかくさいにおいかとかわれれば後者なんだけれど、嗅いだことのない

種類のものであった。そのにおいを嗅ぐと、なぜか、泣いている母を思い出すのだった。

おばあちゃんの言葉通り、次の日、私はメモを持って大型書店にいった。そのころはコンピュータなんてしろものではなくて、店員は、分厚い本をばらばらめくって調べてくれた。

「これ、書名正しいですか？」店員は困ったように私に訊いた。

「と、思いますけど」

「著者名も？ 該当する作品が、見あたらないですよね」

「はあ」

私と店員はしばらくのあいだ見つめ合った。見つめ合ってもしかたない、ひとつお辞儀をして私は大型書店を去った。

「おばあちゃん、なかったよ」

そのまま病院に直行して言うと、おばあちゃんはおからさまに落胆した顔をした。こちらが落ちこんでしまうくらいの落胆ぶりだった。

「本のタイトルとか、書いた人の名前が、違ってるんじゃないかって」

「違うよ」 A おばあちゃんは言った。「あたしが間違えるはずがないだろ」

「だったら、ないよ」

おばあちゃんは私の胸のあたりを見つめていたが、

「さがしかたが、甘いんだよ」すねたように言った。「どうせ、一軒いってないって言われてすぐ帰ってきたんだろ。店員も、あなたとおなじような若い娘なんだろ。もっと知恵のある店員だったらね、あちこち問い合わせ、根気よく調べてくれるはずなんだ」

そうして B 横を向き、そのままいびきをかいて眠ってしまった。

私はメモ書きを手にしたまま、パイプ椅子に座って空を見た。季節は冬になろうとしていた。空から日線を引き下げると、バス通りと、バス通りを縁取る街路樹が見えた。木々の葉はみな落ちて、寒々しい枝が四方に広がっている。

すねて眠るおばあちゃんに視線を移す。私の知っているおばあちゃんより、ずいぶんちいさくなってしまった。それでも、もうすぐ死んでしまう人のようにはどうしても見えない。また、もうすぐ死んでしまうのだと思っても、不思議と私はこわくなかった。きつと、それがどんなことなのか、まだ知らなかったからだろう。今そこにいるだれかが、永遠にいなくなってしまうということが、いったいどんなことなのか。

その日から私は病院に行く前に、書店めぐりをして歩いた。繁華街や、隣町や、電車を乗り継いで都心にまで出向いた。いろんな本屋があった。雑然とした本屋、歴史小説の多い本屋、店員の親切な本屋、人のまったく入っていない本屋。しかしそのどこにも、おばあちゃんのさがす本はなかった。

手ぶらで病院にいくと、おばあちゃんはきまって落胆した顔をする。何か意地悪をしているような気持ちになってくる。

「あんたがその本を見つけてくれなけりゃ、死ぬに死ねないよ」

あるときおばあちゃんはそんなことを言った。

「死ぬなんて、そんなこと言わないでよ、縁起でもない」

言いながら、はっとした。私もしこの本を見つけたさなければ、おばあちゃんは本当にもう少し生きるのではないか。ということは、見つからないほうがいいのではないか。

③「もしあんたが見つけだすより先にあたしが死んだら、化けて出てやるからね」
私の考えを読んだように、おばあちゃんは真顔で言った。

「だって本当じゃないんだよ。新宿にまでいったんだよ。いったいいつの本なのよ」

本が見つかることと、このまま見つけれられないことと、どっちがいいんだろう。そう思いながら私は口を尖らせた。

「最近の本屋ってのは本当に困ったもんだよね。少し古くなるといい本だろうがなんだろうがすぐひっこめちゃうんだから」
おばあちゃんがそこまで言いかけたとき、母親が病室に入ってきた。おばあちゃんは口をつぐむ。母はポインセチアの鉢を抱えていた。手にしていたそれを、テレビの上に飾り、おばあちゃんに笑いかける。母はあの日から泣いていない。

「もうすぐクリスマスだから、気分だけでも思っって」母はおばあちゃんをのぞきこんで言う。

「あんた、知らないのかい、病人に鉢なんか持つてくるもんじゃないんだよ。鉢に根付くように、病人がベッドに寝付いちまう、だから【X】が悪いんだ。まったく、いい年してなんにも知らないんだから」

母はうつむいて、C私を見た。

「クリスマスっぽくていいじゃん。クリスマスが終わったら私が持つて帰るよ」

母をかばうように私は言った。おばあちゃんの乱暴なもの言いに私は慣れていないのに、もっと長く娘をやっている母はなぜか慣れていないのだ。

案の定、その日の帰り、タクシーのなかで母は泣いた。またもや私は、ひ、と思う。

「あの人は昔からそうなのよ。私のやることなすことすべてにけちをつける。よかれと思ってやっていることがいつも気に入らないの。私、何をしたってあの人にお礼を言われたことなんかはないの」

タクシーのなかで泣く母は、クラスメイトの女の子みたいだった。^⑤母の泣き声を聞いていると、心がスポンジ状になって濁った水を吸い上げていくような気分になる。

あああ、と私は思った。これからどうなるんだろう？ 本は見つかるのか？ おばあちゃんは死んじゃうのか？ おかあさんとおばあちゃんは仲良くなるのか？ なんにもわからなかった。だって私は十四歳^{さい}だったのだ。

クリスマスを待たずして、おばあちゃんは個室に移された。^⑥点滴^{てんてき}の数が増え、酸素マスクをはめられた。それでも私はまだ、おばあちゃんが死んでしまうなんて信じられないでいた。病室では笑っている母は、家に帰ると毎日のように泣いた。おばあちゃんが個室に移されたのは、私が鉢植えを持っていったからだと言って泣いた。

その年のクリスマスは冷え冷えとしていた。私が夏から楽しみにしていた母のローストチキンは黒こげで食べられたものではなかったし、ケーキに至っては砂糖の量を間違えたのかまったく甘くなかった。クリスマスプレゼントのことはみんな忘れていくように、私は何ももらえなかった。

そうして例の本も、私は見つけれずにいた。

クリスマスプレゼントにできたらいいと思って、私はさらに遠出をして本屋めぐりをしていたのだが、そのなかの一軒で、年老いた店主が、たぶん絶版になっていると教えてくれた。昭和の^{かつやく}はじめに活躍した画家の書いた、エッセイだということも教え

てくれた。^⑦それで、それまで入ったこともなかった古本屋にも、足を踏み入れていたというのに。

黒こげチキンの次の日、冬休みに入っていた私は朝早くから病院にいった。見つけれなかった本のかわりに、黒いくまのぬいぐるみを持っていった。

「おばあちゃん、ごめん、今古本屋さがしてる。かわりに、これ」

おばあちゃんはずいぶん痩せてしまった腕でプレゼントの包装をとき、酸素マスクを片手で外して D 言う。

「まったくあんたは子どもだね。ぬいぐるみなんかもらったってしょうがないよ」

これにはさすがにかちんときて、個室なのをいいことに、私は怒鳴り散らした。

「おばあちゃん、わがまますぎるっ。ありがとくらい言えないのっ。私だって毎日毎日日本屋歩いてるんだから。古本屋だって、入りづらいのにがんばって入ってるんだから。古本屋に私みたいな若い子なんかいないのに、それでも入ってって、愛想の悪いおやじにメモ見せて、がんばってさがしてるんだからっ。それにっ、おかあさんにポインセチアのお礼だって言いなよっ」

^⑧おばあちゃんは目玉をぱちくりさせて私を見ていたが、突然笑い出した。私の覚えているよりは数倍弱々しい笑いではあったけれど、それでもすごくおかしそうに笑った。

「あんたも言うときは言うんだねえ。なんだかみんな、やけにやさしいんだもん、調子くるってたの。美穂子なんかあたしが何か言うと目くじらたてて言い返してきたくせに、やけに素直になっちゃって」

美穂子というのは私の母である。外した酸素マスクをあごにあてて、おばあちゃんは窓の外を見て、ちいさな声で言った。

「あたし、もうそろそろいくんだよ。それはそれでいいんだ。これだけ生きられればもう充分。けど^⑨気にくわないのは、みんな、美穂子も菜穂子も沙知穂も、人がかわったようにあたしにやさしくするってこと。ねえ、いがあるってたら最後の日まで人はいがみあってたほうがいいんだ。許せないところがあつたら最後まで許すべきじゃないんだ、だってそれがその人とその人の関係だろう。相手が死のうが何しようが、むかつくことはむかつくって言ったほうがいいんだ」

おばあちゃんはそう言っつて、酸素マスクを口にあてた。くまのぬいぐるみを、自分の隣に寝かせて、目を閉じた。くまと並んで眠るおばあちゃんは、おさない子どもみたいに見えた。

(角田光代『さがしもの』より)

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 本文中の A) D) の中に入る語として適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ずけずけと イ ぴしゃりと ウ ちらりと エ ふいと オ さっぱりと

問二 — 線部①「こういうもの言い」とありますが、どのような「もの言い」なのですか。それを言い換えた部分を、本文中から七字でそのまま抜き出して答えなさい。

問三 — 線部②「何か意地悪をしているような気持ちになってくる」とありますが、その説明としてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア おばあちゃんに毎回おおげさに落胆らくたんされるので、だんだん自分もいやになって投げやりな気持ちになってくるということ。

イ おばあちゃんが毎回落胆するのを見ると、自分がわざと見つけないでいるような申し訳ない気持ちになってくるということ。

ウ おばあちゃんが落胆してどんどん落ちこんでいくにつれて、自分がだんだん強い立場になっているのを感じるということ。

エ おばあちゃんが毎回きまって落胆するので、おばあちゃんがわざと意地悪をしているのではないかと思えてきたということ。

問四 — 線部③「私の考え」とありますが、どのような考えですか。「〜という考え」に続くように五十字以内にまとめて答えなさい。

問五 ——線部④「口を尖らせた」とありますが、ここでのこの語句の意味としてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

- ア 申し訳なさそうにすること
- イ 心配そうにすること
- ウ 不満そうにすること
- エ 強い口調になること

問六 【X】に入る熟語を、本文中からそのまま抜き出して答えなさい。

問七 ——線部⑤「母の泣き声を聞いてみると、心がスポンジ状になって濁った水を吸い上げていくような気分になる」とありますが、このときの私の気持ちの説明としてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

- ア まるで中学生のような頼りない母の姿を見て、母への同情がこみあげるような気持ち。
- イ めったに泣かない母が泣くことで、自分のなかにも悲しみがあふれるような気持ち。
- ウ 自分がすっかりしなくてはこの責任感のために、押しつぶされるような気持ち。
- エ 周りに対するいらだちやこの先に対する不安が、次々とわいてくるような気持ち。

問八 ——線部⑥「それでも私はまだ、おばあちゃんが死んでしまうなんて信じられないでいた」とありますが、「私」にとって「死」とはどのようなものでしたか。二十字以内で答えなさい。

問九 — 線部⑦「それで、それまで入ったこともなかった古本屋にも、足を踏み入れていたというのに」とありますが、この

一文の続きを書くとしたら次のどの文があてはまるか、もっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア やはり、例の本を見つけたことはできず、私はおばあちゃんの言葉を疑い始めていた。

イ どこのお店にも置いていなかったの、例の本がなかったのは、そういうことかとわかった。

ウ 本を見つけれなかった私に対するおばあちゃんの態度は、許せないものだった。

エ 私が何度理由を説明しても、おばあちゃんは、例の本をあきらめてくれなかった。

問十 — 線部⑧「おばあちゃんは目玉をぱくりさせて私を見ていたが、突然笑い出した」とありますが、おばあちゃんが「突

然笑い出した」のはなぜですか。その説明としてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 「私」が怒鳴ったのに驚いたが、私が怒りをそのままぶつけてきたことに痛快さと嬉しさを感じたから。

イ 「私」がいきなり怒鳴ってきたことに戸惑いを感じ、どうしていいかわからなくなってしまったから。

ウ 「私」に怒鳴られたことで、驚きとともに私の成長を喜び、孫をかわいらしく思ったから。

エ 孫の「私」がまるで自分と同じように怒鳴ったことで、似たものどうしのおかしかったから。

問十一 — 線部⑨「気に入らないのは、みんな、美穂子も菜穂子も沙知穂も、人がかわったようにあたしにやさしくするって

こと」とありますが、おばあちゃんはみんなにどのように接してほしいと思っていたのですか。「〜」と思っていた。」に続くように二十字以内で考えて答えなさい。

問十二 本文中で描かれた内容から、私の母が、おばあちゃんに対して、どのような気持ちを持っていたことがわかりますか。もっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア おばあちゃんの娘としての責任を最後まで果たそうとしつつも、わがままなおばあちゃんに対する怒りをおさえきれないでいる。

イ おばあちゃんのことを心から心配してなるべくやさしく接しているものの、気持ちのすれ違いを感じてしまい苦しんでいる。

ウ おばあちゃんの具合が悪くなって初めておばあちゃんの本心を知り、これまでの娘としての自分のふるまいを心から悔んでいる。

エ おばあちゃんへの長年の怒りをおさえ、仲の良い親子になろうと努力してみたが、やはり無理なことだったとあきらめている。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

国語という教科で、なぜ、何を学ぶか。そのことを考えるために、最初に糸口にしたいのが、次の言葉です。

理想と現実

言うまでもなく、意味の反対の言葉です。① 対義語などといいます。「国語って何を勉強するのか」の「何」に当たる事柄はたくさんあって、とても一口には言えないのですが、**I** この二つの言葉がどう関係するかを考えるだけで、国語で学ぶことの大事なことの一つがわかると思うのです。そして、なぜ国語を勉強するのかを考えるヒントにもなるでしょう。

では、早速ここで問題。「理想」という熟語を定義してみてください。

X。だいたいそういう感じですね。 **II** 難しくはないでしょう。

じゃあ「現実」を定義したら、どうなるでしょう。

「実際にあるこの世のこと」、「事実」。そう、間違っていない。だけどぴたり合うかというと、ちょっと物足りなくないですか。「もっと現実を見つめなさい」などという言い方を思い出してください。私たちが「現実」という言葉を使う時には、「自分だけで思い込んでいないで」とか、「理想」ばかり追いかけてはだめだ」というような気持ちが込められている場合があります。「**A**」というのは、私たちを取り巻く実際の事柄すべてに当てはまりますが、「**B**」の方は、もう少し意味が狭くて、しかも「思い込み」と食い違うもの、「**C**」の実現を邪魔するもの、という意味合いがある。「**D**」の前提に「想念」や「理想」があります。「想念」や「理想」があるから「現実」があるわけです。

逆のこともまたいえるでしょう。「想念」「理想」が「現実」になったら、それこそ理想的だし、私たちはそのために生きていくといってもよいかもしれせん。だけど想念も理想も、簡単に実現しはしないのだと、教えられたりしたことがあります。私はずいぶん言い聞かせられてきました。言われ続けたあげくに、思ったこと、願ったことはまずかなわないんだ、と決め込むようになった気さえします。

それは少し行き過ぎにしても、理想は、すぐに現実になったりしてはいけないもののような雰囲気があります。理想は実際にはかなえられないもの、目指されるもの、つまり現実には存在しないもの、というニュアンスがあるといつてよいでしょう。

このように理想と現実の関係は、相対的で、微妙です。でも私たち人間はこの世に生きていて、Ⅲ 現実を理想化したいと願っています。ですから、人間をめぐる書かれた文章——つまりあらゆる文章——だって、基本的に理想と、それに相対する現実という枠組みをいつも抱え込んでいる、とっていいでしょう。

文章は全部理想と現実という枠組みを持っているだなんて、少し言い過ぎのような気がします。えっ、と思った人もいるかもしれない。Ⅳ 「理想」だけだと足りないですね。先ほどから「理想」と組み合わせて用いていた「想念」とか、あるいは「概念」とか「心」とかを合わせて考えてみてください。そうすれば、文章のほとんどは、「理想」（想念・抽象）と「現実」（事実・具体）の関係から成り立っている、ということに気づくでしょう。事実というものは、素粒子のような微小なものから、世界や宇宙といった広がりを持つものまで、無数にあります。一つ一つを知ろう、捉えようとしたら、訳がわからなくなってしまう。放っておいたら事実の洪水に、私たちは押し流されてしまうのです。それを整理したり、体系化したりして、事実を事実としてしっかり受け止めるよう導いてくれるのが、理想や想念や抽象概念です。大事なのは、理想（想念・抽象）と現実（事実・具体）の関係なのです。

では、その理想と現実の関係について、具体的に考えてみましょう。次の文章がヒントになると思います。

どうすれば虹の根もとに行けるか
黒井千次

子供の時に虹を見たことのある人ならば、誰でも一度はあの巨大な半円形の橋の根もとまで行ってみたい、と思った覚えがあるに違いない。初めて虹に出会ったのがいつであったかは忘れてしまったが、その根もとがどんなふうになっているのだろう、と夢みるように考えた記憶だけはほくの中にもはっきり残っている。

筆者は子供の頃から「虹の根もと」が見たかった、と言っています。そして「誰でも一度は」その根もとに行ってみたくは思っただけで、というのです。もしかしたら、ちょっと待ってくれと、違和感を持った人もいるかもしれませんね。そんなことを考えたこともない、勝手に決めつけなくてくれ、と。ただそういう人でも、何かに一心に憧れて、それに近づいてみたいと思つたことはあるはず。そういう体験を思い出し、それが虹の根もとだと仮定してみて、その時の自分を振り返ってみることを求め

ている、と考えてみればよいでしょう。⑥ 具体的なことは、そのイメージを生かして味わうとともに、それをいったん抽象化して、一般化してみるのが大切です。

(渡部泰明「国語をめぐる冒険」より)

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 本文中の ～ に入る語として、もっとも適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア たしかに イそれほど ウ 少なくとも エ かならず オ たいてい

問二 ——線部①「対義語」について、次の熟語の対義語を漢字で答えなさい。

- 偶然 ⇄ 結果 ⇄ 部分 ⇄

問三 本文中の には、「理想」を定義した語句が入ります。あなたは、「理想」という言葉をどのように定義しますか。あなたの考える「理想」の定義を十五字以内で答えなさい。

問四 本文中の ～ にあてはまる語の組み合わせとしてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

- ア A 〓 現実 B 〓 事実 C 〓 現実 D 〓 理想 イ A 〓 現実 B 〓 事実 C 〓 理想 D 〓 現実
ウ A 〓 事実 B 〓 現実 C 〓 現実 D 〓 理想 エ A 〓 事実 B 〓 現実 C 〓 理想 D 〓 現実

問五 ——線部②「そのため」とありますが、「その」が指し示す内容を「～ため」に続くように、文中のことばを用いて十五字以内で答えなさい。

問六 — 線部③「理想と現実の関係は、相対的で、微妙びみょうです」とありますが、このことの説明としてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 理想があるからそれに対する現実が存在するのであって、どちらか片方だけでは存在しないものであるということ。

イ 理想は現実と比較ひかくすることによってその価値がはっきりするのであって、現実とまったく異なることに価値があるということ。

ウ 理想は決して現実にならないからこそ、理想と言われているのであって、それが現実になつては意味がないということ。

エ 理想は理想、現実じゆんじつは現実として、はっきり分けて考えるべきであり、両者を比べて考えることはできないということ。

問七 — 線部④「事実じじつの洪水こうずいに、私たちは押し流されてしまう」とありますが、これは、どのようなことをたとえた表現ですか。二十五字以内でわかりやすい表現に言い換えなさい。

問八 — 線部⑤「それ」が指し示す内容を、文中のことばを用いて十字以内で答えなさい。

問九 — 線部⑥「具体的なことは、そのイメージを生かして味わうとともに、それをいったん抽象化して、一般化してみる
ことが大切です」とありますが、

(1) この文章の中で、筆者は、黒井千次の「どうすれば虹の根もとに行けるか」という文章を題材として、このことを説明しています。黒井千次の文章の中で「具体的なこと」にあたるものを、十二字でそのまま抜き出して答えなさい。

(2) このような筆者の考え方にならって、次の具体的なイメージで表現された内容を、抽象化した一般的な表現に直すとしたら、たとえば、どのようになると考えられますか。それぞれ十五字以内で答えなさい。

- 1 大きな岩に胸が押しつぶされそうだ。
- 2 大空高く飛びまわる鳥になりたい。

問十 本文で述べられている筆者の考えと合っているものを、次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 国語を学ぶ上で大切なことの1つは、文章で述べられている理想の現実化を目指すことで、事実をよりよいものにする
ことである。

イ 国語を学ぶ上で大切なことの1つは、文章で述べられている事実をあるべき現実として理解し、抽象的な事柄にまで
広げて考えることである。

ウ 国語を学ぶ上で大切なことの1つは、文章で述べられている現実を理想にするために、いったん抽象化して理解する
ことである。

エ 国語を学ぶ上で大切なことの1つは、文章で述べられている具体的なイメージを抽象的な事柄に置きかえて理解する
ことである。

三次の短文中の——線部のカタカナを、漢字に直しなさい。

- 1 ユダンして試合に負けてしまった。
- 2 短歌とハイクを学習する。
- 3 テンケイ的な例をあげる。
- 4 シンキイッテン、新しいことに挑む^{いど}。
- 5 リレーの選手のホケツに選ばれた。
- 6 それぞれのリヨウイキを守る。
- 7 カテイ科の時間に卵焼きを作る。
- 8 時計のビヨウシンを合わせる。
- 9 女王ヘイカの死を心からいたむ。
- 10 特急列車がツウカする。

令和五年度入学試験

二月一日(午前)

実施

東京女学館中学校

国語解答用紙

(字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。)



一問一 A

B

C

D

問二

問三

問四

という考え

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

と思っていた。

問十二

二問一 I

II

III

IV

問二 1

2

3

問三

問四

問五

ため 問六

問七

問八

問九 (1)

(2) 1

2

問十

三

9	5	1
10	6	2
7	3	
8	4	

評	点
<input type="text"/>	



受 験 番 号
<input type="text"/>

氏 名
<input type="text"/>